

## 臨床・障害 8 (852~859)

- 座長 内山 勉・後藤秀爾
- 852 発達水準1・2にある子供の主導的活動  
—早期発達診断検査資料の検討から—  
秋田大学 ①川村 秀忠
- 853 発達水準3にある子供の主導的活動  
—早期発達診断検査資料の検討から—  
国立特殊教育総合研究所 ②志田 倫代
- 854 「実践と発達の診断(試案)」の検討(5)  
—発達の遅滞を伴った肢体不自由児の治療教育の方法論的研究—  
埼玉大学 西村 章次
- 855 一歳半児の発達診断とその経過  
—三歳前後の発話と発達領域との関連(2)—  
群馬大学 中塚 みゆき
- 856 箱庭療法に関する研究  
—Y・G性格検査との関連—  
南山短期大学 木村 晴子
- 857 聴覚障害幼児の精神発達について  
富士見台幼児聴能言語訓練教室  
内山 勉
- 858 ある自閉児のフォローアップ研究  
—発達経過と心理検査の検討をとおして・その1—  
安城学園女子短期大学 ①後藤 秀爾
- 859 ある自閉児のフォローアップ研究  
—発達経過と心理検査の検討をとおして・その2—  
名古屋大学 ②譲 西賢

## 〔発表論文集の訂正〕

854 診断結果の再点検を行った結果、遅滞のない CP 群、Cr 群を1名ずつ入れ替え、遅滞のある群について Cr 群から Cp 群へ2名移すという変更を行った。そのため、Table 1, Fig. 1~3に幾つか訂正があったが本文の記載内容には変更がない旨、説明された。

## 〔討論の概要〕

852—853 中塚からこの発達診断検査のねらいについて、西村からは、理論的背景をめぐる質問がなされ、若干の論議が展開された。川村からの応答の主旨は、ヴィゴツキーの最近接領域理論を依り処として、子どものオバートな行動観察を通して発達を捉えようとする研究であり、発達の中核的活動と他の活動との関連づけを探ろうとしているとのことであった。さらに、発達区分の根拠、手行為の発達論的な意味、発達研究における発達仮説の位置づけなどについて議論されたが、その中で、発達論・発達仮説に基づいた発達理解を説く西村と、オ

バートな活動水準での把握の必要性・有用性を論ずる川村と、両者の立場が明らかにされた。

854 川村から、運動障害と認識能力障害を検討の視点としたことの根拠を中心に幾つかの質問がなされ、西村から、障害の本質と発達状況との関連を見る上で、従来の障害種別での検討よりも、発達領域を視点としての検討が当面の課題であると考えられ、性差・年齢差を考慮しての検討は今後の課題としたいとの回答がなされた。

855 内山より質問紙作成の目的、検査状況についての質問が、さらに、先の852—853での議論を受けて西村より、発達仮説をめぐるこの質問が出された。それに対して、地域保健活動の実践上、言語発達領域に視点を置いたスクリーニング用の検査の必要性からなされた研究であり、不十分ながら、一応発達基準の設定を考えてのものである旨の回答がなされた。

856 西村より、研究のねらい、箱庭に投影される内容の理解の仕方についての質問が出され、木村から、この研究が、心理治療技法としての箱庭を、より多面的に探ろうとする一連の試みのひとつであること、また、治療者と来談者との関係の中で展開する箱庭表現には、治療上有意義な投影が可能となると考えている旨の説明がなされた。

857 西村から、聴覚障害児の発達の特徴について、手持ちのデータとの比較で質問が出され、それに対し内山の属する訓練教室は、保育園での総合保育を1才代から積極的にすすめており、そのことが、他の壘学校幼児部の児童との、社会性発達の相違の1要因となっているのではないかとの回答がなされた。

858—859志田から、ここで用いた4種のテストバッテリーの根拠とねらいについて、川村からは、聴覚性の言語障害としてのケース把握の方向性を持たなかったことについて、内山からは、学習障害と自閉の関連について、西村からは、作話傾向の発達の理解の仕方について質問が出された。これらの質問に対し、この研究の主旨が、小学校高学年段階での学習上の問題を含んでの適応過程の行きづまりという問題に対し、症例検討を通して打開策を模索しようとしたものであり、そのために必要な理解を深め、両親と共に考えようとしたものであること、また自閉児の言語発達は、その遅滞と病理性の2面から理解すべきであること、自閉から学習障害へと移行するとの視点は、診断上の問題を含み疑念があることなどの研究上の立場が説明された。

(後藤秀爾)